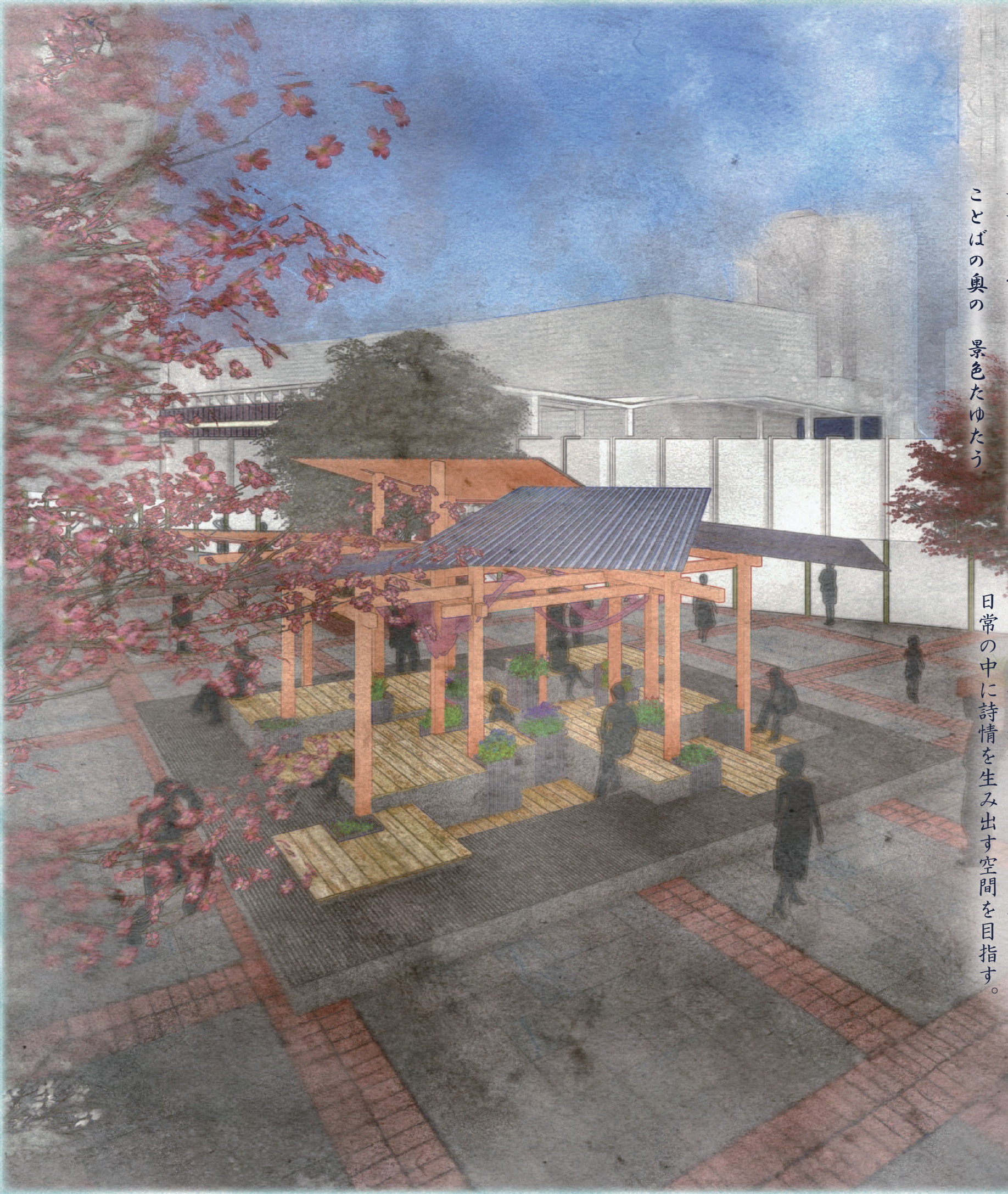


ゆらぎつつ　むすびほどける　ひとの間に
ことばの奥の　景色たゆたう

都会の喧騒と繁華街のざわめきに包まれたこの地で、季節の移ろいを感じながらひと息つける東屋を提案する。和歌の構造を東屋に落とし込み、四季の変化を和歌的な感覚で表現することで、日常の中に詩情を生み出す空間を目指す。



売
和歌とは

「和歌」——それは、わずか三十一音で情景や心情を表現する世界最短の詩である。
五・七・五の上の句、七・七の下の句からなり、上の句で情景や状況を描き、下の句で心情や結論へと展開する。

秋の田のかりほの庵の
苦をあらみ

わが衣手は露にぬれつつ

天智天皇

上の句：秋の田に建つ仮小屋。その苫は粗く（情景）
下の句：だから私の袖は露に濡れてしまう（結論）

式
和歌の構造

和歌の構造は、単なる前半・後半の關係にとどまらず、「余白」や「暗示」、そして「気配」といった興行きのある表現を内包している。

余白の美

全てを説明せず、読み手の解釈に委ねる

暗示の効果

一方で示したものが、もう一方で意味を持つ

氣配の表現

直接的に見えないものの存在を感じさせ、空間に奥行きを与える。

五・七・五・七・七の中に存在するこれらの要素を建築に反映する技法を「このとは構え」と名づける。和歌のもつ「余白」「気配」「暗示」といった特徴を建築に落とし込む技法として、詩的な空間の構築を意味するものになっている。

参
敷地

敷地は「新宿駅東口駅前広場。繁華街へ向かう人々が絶えず行き交い、西側にはオフィス街が広がるこの場所に、和歌的な余白を生み出す東屋を提案する。」上の句と下の句の対比を用い、都市の喧騒の中に、一歩引いて季節の移ろいを感じる空間を創出する。

